

## 第4章 反日韓国は日本が作った



のないものに執着しても始まらないという諦観です。

また、臨済禪の世界では「仏に逢うては仏を殺し、祖に逢うては祖を殺し、羅漢に逢うては羅漢を殺し、父母に逢うては父母を殺し、親眷に逢うては親眷を殺し……」と、絶対と思われる存在をとりあえず否定しつくすことが悟りの道であるとさえ言い切るのです。

これは他の宗教、とりわけ一神教からは出てくることのない教えといえます。たとえば、「ゴッドに逢うてはゴッドを殺し、イエスに逢うてはイエスを殺し、精霊に逢うては精霊を殺し」などというクリスチヤンがいれば、その者は狂人と思われるでしょう。中世であつたら、祖を殺し、父母を殺す——、李朝時代の頑迷な儒者が聞けば、それだけで卒倒は必至です。

こんな教えをありがたがる倭奴は食獸にも劣る輩だというかもしませんが、おあいにくさま、臨済は唐の人です。

仏教的なものの考え方、キリスト教の教え、儒教的な価値観、それぞれに真理があり、優劣を語る愚はいたしませんが、日韓の思考の違いを語る上で、ベースとなる宗教観の違いを見ていくのは、それはそれで意味のあることかと思います。

## ⑥ K係数について

### 同情と優越心

われわれ日本人は韓国および韓国人について語るとき、どこか喉に引っかかるような、何ともすつきりしないものを感じているはずです。他の国、たとえばアメリカやロシア、あるいは中国に関してさえもズケズケものを言う人でも、こと相手が韓国になると、奥歯どころか前歯に物が挟まつたように歯切れが悪くなる。そこまでいかないまでも、「韓国人」というべきところを「韓国人の人」と言つてみたり、たとえそれがまつとうな韓国人（人）批判であつても、「そういう人たち（そういう事例）ばかりではないとは思うけど…」「日本人にも言えることだけ…」と、いわずもがなのフォローを付け加えてみたり。どうも日本人には、韓国を語るとき、どこか一拍置くような、ある種の遠慮を働かせているような、あるいは相手に下駄げたを履かせて、こちらが一段下に下りるような、そういう一種の性癖があるような気がしてなりません。つまり、われわれの口や筆を通して語られる「韓国」とは、本来語りたい韓国に、この性癖によるバイアスがかかつたものというなります。私はこのバイアスをKorea係数、略してK係数と呼ぶことにしています。」」」でいうK係数とは、円周率のようなものと考えてく

ださい。日本人が韓国を語るとき、必ずこのK係数の影響を受けているのです。お花畠左翼の人はもちろん、嫌韓派の人もそれは例外ではありません。当然のことながら、K係数には個人差があります。K係数の受ける影響の大きさに合わせて、1K、2K、3K……というふうに倍数化するとわかりやすいかもしれません。たとえば、韓国大統領の告げ口外交に関して、産経新聞は×1K、朝日新聞は×3Kの論調だった、という具合に表現できます。

実際、朝日新聞のソウル支局長（当時）・市川速水氏と産経新聞のソウル支局長（当時）・黒田勝弘氏の対談本『朝日vs.産経ソウル発—どうするどうなる朝鮮半島』（朝日新書）を読むと、両紙の韓国報道に対するスタンスの違いがくつきりと見て取れます。

《黒田》今でも僕が韓国批判をすると市川さんは差別的とか、優越感であれこれ批判しているとか、冷やかしているとか、バカにしているとか批判する。

市川 正確に言うとですね、黒田さん御自身はそうではないかもしれないけど、読者をその気にさせちゃう（笑）。黒田さん、大記者なんだから、責任持つてもらわないと。

黒田 あのねえ、市川さんも朝日新聞の記者たちも韓国で生活すれば、こりやアカン、こりやなんじやと、非公式にはすぐ文句言つてるわけですよね。でも、そう書いちやいかん、日本人に向けてそれを言うと韓国に対する差別、偏見を助長すると。僕も最初はそう思つてましたが、途中から、それはやつぱりよくないんだと。逆に偽善的だと……。

市川 偽善ではなく、マナーが必要だと言つてるんです。

黒田 事実として問題があるなら、それを隠したり見ないふりをする方が逆に問題をこじれさせるのでないかと。（中略）韓国はもう過去の韓国じやない。言いたいことを言つていいんです。批判していいんですよ。その結果、日本人が偏見を持つか、差別意識を持つかどうかは別の問題です。（中略）今や読者、視聴者たちが独自で情報を得ているし、ビジネスを含めいろいろな接觸があるわけだから、国民が自分で判断することができる。配慮するほうが朝日の妙な差別意識なんですよ。ある意味では。

市川 差別意識なんてないつもりですけど。

黒田 相手をまともに見ていないんだな。』

この対談を通して、朝日新聞の市川氏は一貫して「韓国に対する批判や論評に関して配慮しなければならない。何故なら日本人の韓国人に対する差別意識を助長するから」というスタンスを崩しません。それは、過去、日本に統治された歴史からくる韓国の複雑な心境に配慮してということのようで、同時に、日本人には韓国に対する差別、偏見がもともとあるのだから、韓国に批判的な記事を書くと、それらを助長することになりかねないという意見でした。《僕は基本的には報道機関が韓国を批判することは適当ではないと思いますよ》とまで市川氏は述べています。

この韓国に対する特殊な「配慮」にあたる部分がK係数です。市川氏は「マナー」という言葉を使いましたが、この語には若干違和感を覚えます。

対して産経新聞の黒田氏は「僕も最初はそう思つてましたが」と自分の発信する記事にもK係数が働いている（いた？）ことを認めています。

その上で、私は『日本と韓国は過去に支配、被支配の関係にあった、だから韓国は被害者、弱者、あるいは同情すべき対象だとみると、それは、それもある種の優越感じゃないか。だから、普通の国、普通の外國として対等に考え、対応することが相手にとつてもいいことなんじやないか、それがまともな付き合いではないかと僕は思った』という黒田氏の意見に概ね共感を覚えるものです。

つまり、K係数を乗じることによって、私たちの語る「韓国」は、「普通の国」「普通の外國」という枠から遠ざかり、「特殊な隣国」になってしまっている。いつまで「特殊な隣国」でいるのか、その方が不健全ではないかと黒田氏は述べているのです。黒田氏の言う「同情という名の優越感」こそまさにK係数の本質であると思います。

降って沸いたような韓流ブーム、あれも、日本人のK係数を計算に入れてのブームの仕掛けがあつたのは事実でしょう。韓国のタレントだから素晴らしいと思わなければいけない、韓国のドラマが嫌いだなどというと差別主義者に思われてしまふ、そんな複雑な心理が、プロの評論家筋にもまったくなかつたかといえば疑問です。

## 酸性か安全か

『11PM』といえば60～80年代にかけて一時代を築いた、深夜ワイドショーの草分け的番組でした。この番組の人気コーナーのひとつに「秘湯の旅」シリーズがあります。「うさぎちゃん」と呼ばれた女性リポーターが、各地の温泉を紹介するという、今思えば、たわいのないものでしたが、若い女性の入浴場面が見られるということで、お父さん世代を中心に結構需要があつたように記憶しています。その「秘湯」コーナーが初の海外取材、それも韓国の温泉を紹介したことです。記憶は定かでありませんが、確かに釜山あたりのひなびた温泉地でした。ひととおり、うさぎちゃんたちの温泉リポートのVTRを見たあと、スタジオにいる司会者の藤本義一（作家）氏がこう言つたのを今でもはつきり覚えています。

「今、うさぎちゃんが、「韓国では珍しい安全な温泉です」と言いましたけど、これは実に失礼な発言ですよ。これはお詫びしなくてはいけません」。

私は一瞬、「？」と思いました。もし、藤本氏の言うとおりなら、確かに番組レポーターとして誤解を招きかねない不適切な発言といわざるを得ません。取材を受け入れてくれた韓国の観光協会に対して失礼極まりないことです。しかし、私の耳にはうさぎちゃんの言葉が鮮明に残っていました。うさぎちゃんはこう言つたのです。

「韓国では珍しい酸性の温泉です」。

つまり、温泉の湯質の説明をしただけなのでした。番組途中、放送を見ていたうさぎちゃんから局に電話があり、藤本氏は自分の聞き間違えであつたことを認め、再訂正しましたが、どうのような聞き違いをすれば「酸性」が「安全」になるのか、正直不思議に思つたものです。ひとつ言えるとしたら、藤本氏の無意識の領域にあるK係数がそうさせたのだと思います。番組初の韓国ロケ、失敗は許されぬという思いと、（韓国併合時代を知らない）若い女の子だけに、韓国さま相手に何か粗相をやらかさないかといういらぬ心配が、そのような錯誤を生んだのです。日本人は常に韓国に迷惑をかけている、韓国に蔑視的な態度を取つてゐるのでは、という加害妄想的な自虐です。同時に、藤本氏自身にも「韓国の温泉って本当に安全なの？」という、上から目線があつたのも事実でしょう。

このようにK係数とは、韓国への贖罪意識が生んだ過度な配慮と優越感がほどよくブレンドされた独特のフレバーなのです。

## K係数を乗り越えるために

本書は、むろん読者にK係数の影響下からの脱却を促すのですが、性急にこれを期待するものではありません。そもそも日本人の意識からK係数を完全排除するのは現時点ではまず不可能かと思います。良くも悪くも相手に遠慮したり、一歩引いてものを言うのが、日本人の特性でもあるからです。そこでアドバイスするとすれば、韓国および韓国人についてのトピックに触れる際に、常に「K係数」という言葉を意識しておくということです。

知人と韓国について語りながらも「今、俺の話はK係数入っているな」といつたように、自己チェック機能を働かせてください。TVを見ながら「このコメントデーター、K係数強いな。2Kあるよ」など、自然に口をつくようになればしめたものです。

そして、できれば、K係数という語を「暗黙の了解」として定着させてほしいのです。韓国についてあからさまな批判がはばかれる場合、「K係数入れてしゃべるけど…」と前置きして会話を始めれば、相手もそれとなく割り引いて聞いてくれる、そのようになれば最高です。いつてみれば、表向きは「税込価格」、暗黙のうちに「税抜き価格」の会話が成立しているということになります。この手の話、つまりデイアープな韓国ネタに不慣れな、あるいは未知数の第三者を交えて会話しなければならないときにも有効です。こうやって少しずつK係数を無力化していくことが、むしろ最良の策ではないかと思います。

## 抗日英雄はメイド・イン・ジャパン

### 英雄＝テロリスト

韓国で、伊藤博文暗殺犯の安重根<sup>アンジョウゲン</sup>がタイムスリップして日本の安倍首相をハルビン駅で狙撃するというトンデモ小説が話題になつてゐるそうです。『安重根、安倍を撃つ』というベタなタイトルのその小説では、狙撃された安倍首相は一命を取り留めるのですが、安重根は殺人未遂で現行犯逮捕されてしまひます。しかし、ここからが庄巻です。裁判にかけられ証言台に立つた安は、「安倍首相の15の罪状」（慰安婦問題、竹島問題、教科書問題、靖国問題など、おなじみの項目が並びます）を述べ自分の行動の正当性を主張します。彼の堂々たる態度は裁判官を感動させて、それまで形勢不利だった法廷の空気を一変させてしまうのだそうです。

このトンデモ小説の作者が、あの家族愛を描いた感動作『父のいた日々』で日本でも知られたキム・ジョンヒヨン氏というのですから、韓国ブンガク界の底知れぬ奥の深さを思い知った次第です。

韓国で三大義士といえば、安重根、李奉昌、尹奉吉となります。かの国でいう義士とは即ち対日テロリストに他なりません。

李奉昌は1932年（昭和7年）1月、昭和天皇の馬車に爆弾を投げつけ近衛兵一人に重症を負わせたいわゆる桜田門事件の実行犯、尹奉吉はやはり同年4月、上海虹口公園で行われた天長節式典に爆弾を投げ込み多数の死傷者を出した上海天長節爆弾事件の主人公で、いずれも劣らぬ殺しのプロフェッショナルですが、彼らに比しても安重根は人気、知名度ともにダントツの存在といえます。いや、単なる義士を超えて、韓国民のアイドル、スーパー・ヒーローといつても過言ではありません。それを裏付けるのは、多種多様な安重根関連グッズの数々です。安の「義挙」を描いた絵本、マンガ、アニメは複数刊行されていますし、彼を模したリアル・フィギュア、ハルビン事件を再現した立体ペーパークラフト玩具、幼児用紙お面など、枚挙にいとまがありません。

### 実は右翼に愛されていた安重根

安の人気が突出して高いのは、対日テロリストの嗜好<sup>こうしょう</sup>的存在だったことももちろんですが、何よりも日本における彼の評価に寄りかかる部分も大きいと思うのです。「評価」というと、いささか語弊があるかもしれません、日本では李奉昌や尹奉吉が単なるテロリストという認識に留まるのに、安重根に関しては、独立運動家、愛国者という一定の地位は与えられているのです。

安重根が実は日本の天皇に対し尊崇の念を持ち、日露戦争の勝利を心から喜んでいたことは、獄中で記した「東洋平和論」を読んでも明らかです。そのためか、日本では今も昔もどちらかというと右翼と呼ばれる人に、安を評価する声が高いといわれます。新右翼運動のオピニオニン・リーダーだった野村秋介氏も歴史上尊敬する人物として安重根の名を挙げていました。また、安が一人殺のローン・ウルフ、一匹狼のヒットマンだったことも右翼の共感と無縁ではないでしょう。安のテロルは多分に極右的ですが、李奉昌や尹奉吉のそれは極左的です。

投獄された旅順監獄の看守で、安の監視役だった千葉十七が、彼の人柄に魅せられ、よき理解者として最期を見送ったという話はつとに知られていますし、安もその礼に報いるために墨書をしたため千葉に贈ったという逸話も胸を打つものがあります。千葉は安の墨書を家宝として終生大切にし、安の供養を欠かさなかつたそうです。刑務所長であつた栗原貞吉、主任弁護士の水野吉太郎も獄中の安と格別な友情で結ばれた日本人でした。水野は公判中、安の行動を幕末の志士になぞり、殺人罪ではもつとも軽い懲役3年が妥当であると主張し続けました。

一方、当時、大韓帝国と号していた韓国国内での安重根、および安の事件の評価はどのようなものだったのでしょうか。

「伊藤を失つたことで、東洋の人傑がいなくなつた。公はわが國に忠実正義をもつて臨み骨を長白山（白頭山）に埋めて、韓国の文明発達に尽くすと揚言していた。日本に政治家多しとい

えども、伊藤のように世界の大勢を見て、東洋の平和を念じた者はいない。実に伊藤はわが国の慈父である。その慈父に危害を加える者があるとすれば、物事の理事を解さないこと甚だしく、おそらく海外流浪人であろう」。

これは伊藤死す、の報を聞いて発した高宗の言葉です。ハーグ密使事件発覚後、伊藤によつて退位を余儀なくされて以来、伊藤を心底煙たがつていた高宗からして、伊藤を「人傑」、「わが国の慈父」とまで形容して哀悼の意を捧げ、安重根に関しては「物事の理事を解さない流浪人（流れ者のヤクザ）」と唾棄にも等しく斬り捨てています。少なくとも高宗の目には、真に「東洋平和」を願っていたのは、安重根にあらず伊藤博文であつたということです。

韓国政府の反応も同様で、当時の知識階級の間では、安について「馬鹿なことをしてくれた」、「國の恥」という見識が大勢でした。「元」がつくとはいへ一国の首相だった人物を殺害したのですから、宣戦布告さえ言い渡されてもおかしくない事件であり、韓国民の動搖は当然といえば当然でしょう。3万人の会員を擁する大韓協会は「殺害は韓国国民の意思ではない」という声明とともに弔辞を送つたばかりか、謝罪団を募つて訪日もさせています。また京城（ソウル）では1万人規模の追悼集会が行われ、追悼会は全国各地へと広がりました。

## 息子たちの対面

伊藤博文暗殺から23年後の1932年（昭和7年）10月に、京城（ソウル）の南山に、伊藤の菩提を弔うその名も博文寺（曹洞宗）が建立されました。建立発起人総代は伊藤とも交流の深かつた韓相龍（ハンサンヨン）。韓氏は「朝鮮の渋沢栄一」の異名をもつ大財界人で、漢城銀行の創始者の一人です。また建立に際しては半島市民から少なからぬ金額の淨財があつたと伝わっています。

1939年（昭和14年）10月15日、その博文寺で行われた30周忌の法要で、伊藤博文の長男・文吉と安重根の息子・安俊生の劇的な対面が実現しました。俊生氏は上海に住んでいましたが、親日団体の視察団『満鮮使節団』の一員として一時帰国していました。

「父の贖罪は報國の誠で／伊藤公靈前に額づく運命の子・安俊生君」「秋深き博文寺に祀る空安重根靈位／仏門の恵みに結ぶ内鮮一体」

これは、俊生氏の博文寺参拝を報じた当時の「京城日報」（1932年10月16日付）の見出しだす。法要の祭壇には伊藤ばかりか安重根の位牌、写真が並べられ、文吉氏が博文だけではなく、父を殺した安重根の位牌にも手を合わせ焼香をするのを見て、安俊生氏は感極まつて号泣したといいます。翌日、二人は朝鮮ホテルで会談、正式な和解がなされました。

この対面に政治的な演出を感じる人もいることでしょう。しかし、古今東西、和解、手打ちというものには、『演出』はつき物なのです。むしろ演出があるからこそ和解もしやす

いといえます。何よりも、対面は、親の罪は子に及ばないという確認の儀式でもあつたのです。

光復後、博文寺は韓国政府の管理下に置かれ、その後、三星（サムスン）財閥に買い取られ、現在跡地には新羅ホテル迎賓館が建つており、寺院を偲ぶものは何も残つてはいませんが、同寺は取り壊されるその一瞬まで、伊藤博文と安重根の靈を祀る寺としてソウルの南山に存在していたことはここに記す価値はあるかと思います。

これが戦前までの安重根の日本、そして韓国の評判の実態でした。安が独立運動の義士、英雄と奉られるのは実は光復後のことですが、それにしても過大に過ぎる評価といえます。繰り返しになりますが、この韓国民の肥大した安重根像は、日本における、ある種の安重根擁護論と無縁ではないと、いうのが私の見解です。

戦後、韓国で、「日本人も尊敬している安重根」→「罪深い日本人さえ安重根の正論を認めざるをえなかつた」→「安重根の行動は正義に違ひない」という論法の飛躍があつたということは充分考えられます。そしていつしか安重根は「東洋平和を願つて惡の日帝と戦つた韓民族が誇る英雄」、伊藤博文は「アジア侵略を目論む日本帝国主義の首魁」といつた、およそ日本に対する評価に変質してしまつたのでした。戦後、韓国では映画にドラマにと、それこそ日本における『忠臣蔵』のように、安重根の「義挙」が何度も映像化されてきましたが、そういうふたフイクションの数々も安の偶像化に一役買つたことでしょう。フイクションがいつの間にか「史実」として語られるようになる、韓国ではぐく当たり前の現象です。

### 「罪を憎んで人を憎まず」と「敵ながら天晴れ」

日本人は「罪を憎んで人を憎まず」という言葉が大好きです。川内康範原作のヒーロー「月光仮面」のキャッチフレーズも「憎むな、殺すな、赦しましよう」でした。

たとえ罪人であつても、その人柄や動機の純粹性については別の評価があつてしかるべきという考え方があるのです。そのために、時に犯罪者に必要以上に感情移入してしまつこともあるようで、とりわけ韓国絡みの事件ではこの傾向が強くなります。たとえば、1958年（昭和33年）の小松川高校事件、1968年（昭和43年）の金嬉老事件、いずれも凶悪な殺人事件でしたが、犯人が在日韓国人ということで、いつしか民族差別問題に論点がすり替えられ、犯人への同情論ばかりが耳目を引くようになりました。金嬉老の事件は単に借金トラブルによる消費者金融業者殺害であり、小松川高校事件の李珍宇（イチヌ）にいたっては、強姦目的で同級生を殺害、学校の屋上に死体を遺棄し被害者の家に遺品を送りつけるなどの挑発行為を楽しむ獵奇的な異常性欲者に過ぎません。差別、貧困、といったマスク好みのお決まりのキーワードが事実を曇らせてしまつたのです。これも形を変えたK係数の干渉かと思われます。いや、干渉というより感傷というべきか。日本人はとくにおセンチなのです。

また、日本人は「敵ながら天晴れ」（あっぱ）という言葉もよく口にしたがります。

以下に紹介するのは、日本最古の軍歌といわれる『拔刀隊』（陸軍分列行進曲）の歌詞の一

部です。作詞は外山正一。

私は官軍わか我敵わがは 天地容れざる朝敵あさだで 敵の大將たる者は  
古今無雙(双)の英雄えいゆうで 之に従ふつづく兵ひょうは 共に標榜ひょうこう決死けっしの士  
鬼神に恥ぬ勇あるも 天の許さぬ叛逆ばんねつを  
起し、者は昔より 榮えし例たとあらざるぞ

敵の大將とあるのは、西郷隆盛を指します。この歌は西南戦争における田原坂の戦いを歌つたものだそうですが、まず「古今無双の英雄」「標榜決死の士」「勇あるも」と最大限の言葉でもつて敵を褒め称えてみせるのが、いかにも日本的かもしれません。敵を褒める軍歌というのは、古今東西においても珍しいのではないでしょうか。

私事で恐縮ですが、東京・上野の産である私は、上野の山にある西郷さんの銅像には幼なじみにも似た親しみを感じます。西郷さんの銅像の後ろにあるのは、彰義隊士の墓です。江戸幕府の残党として上野の山に立てこもった彰義隊を壊滅に追い込んだのは新政府軍の西郷隆盛でした。その西郷も西南戦争で朝敵の汚名を受けることになるのだから運命の皮肉といえます。しかし、歴史は西郷や彰義隊を、天皇に仇あわなす「悪」と断罪していません。彼らは彼らなり

に日本という国を憂えてやむにやまれず行動に出たのであることを日本人は理解しているのです。戊辰戦争での会津藩もむろんしかりで、彼らが「悪」であるならば、白虎隊の物語がここまで熱く現代に語り継がれるはずもありません。

日本の歴史に絶対的悪は存在しないのです。正真正銘の朝敵とされた平将門でさえ明神として祀るのがこの国のメンタリティといえば、説明がつくでしょうか。

### 李完用の悲劇

しかし、韓国ではまったく事情が違います。万物を語るのは、正か邪、正義か悪、上位か下位、黒か白か、被害者か加害者か、の二元論でしかないのです。日本人からすれば、韓国人のこうした原理原則論は、不寛容で融通の利かない頑迷な思考のように見えますが、反対に韓国人から見れば、「黒であり同時に白もある」という日本人的な視点は、曖昧で責任の所在をはつきりさせない欺瞞的な態度の表れと映るようです。韓国人にとって「悪」は悪であって、そこに情状の酌量が入り込む隙間はありません。与えてはいけないのです。

したがつて、韓国では、日韓併合条約を調印（1910年）した、大韓帝国時代の内閣総理大臣・李完用イ・ワニョンに関して現在では文字通りの売国奴であり、呪詛の対象としてのみその名が歴史

に刻まれ、それ以外の評価は許されません。そして李は、戦後、ひ孫によつてその墓が打ち暴かれ、安眠の地さえ奪われています。墓を暴く、遺体を汚す、というのは中国、朝鮮では、最高の恨みの晴らし方、復讐の手段です。併合時代を全否定する戦後韓国の同調圧力は、子孫の手でそれをさせたのです。

では、李完用は果たして國の滅亡を願うような人間だったのでしょうか。彼のやつたことは私欲のために國を売ったことなのでしょうか。断じて否です。彼ら開化派が李朝500年の惰眠から目覚めたとき、既に朝鮮は亡國の淵にありました。日本の保護下に入る、それが唯一、大韓（朝鮮）と韓民族を地上に残す方法であり、李らが取つた行動は苦渋に苦渋を重ねた上の決断だったのです。その亡國の原因のひとつとなつたのは、のちに述べる閔妃の存在でした。ちなみに李完用は終生、日本語を学ぼうとはせず、日本語で話しかけられてもこれを無視し、必要にせまられた場合は英語を使って日本の官僚と会話したという逸話も残るほどの民族主義の強い人物だったといわれています。

「罪を憎んで人を憎まず」、「敵ながら天晴れ」といった武士道にも通じる情の機微を現代の韓国人に理解してもらうのはまず不可能なことと認識するしかありません。

「日本で安重根を評価する声がある」ということは、「1にも2にも安重根は正義」であり、「日本人は安重根の名において、その正義を突きつけられることを恐れている」→「安重根というカードは歴史的妄言を繰り返す日本人にとっての弱点そのものである」という具合に彼ら

の思考のベクトルは向かうようです。つまり、「安のやつたことは正しくはないが、その思いはわかる」という日本式の認識の仕方は、彼らの思考のプログラミングにはありません。人間、理解できないものを理解しろといつてもどだい無理な話だと諦めるべきです。

安易に韓国人に謝罪すると半永久的に謝罪を繰り返させられるということは既に述べましたが、特定の韓国人を安易に褒めることもまた、彼らの尊大で誇大的な態度を増長させる結果を招くことになります。昨今の韓流ブームの際の、あたかも日本の女性のすべてが韓国タレントの魅力に陥落したかのような、韓国マスコミの自慰的な報道ぶりを見てもそれは容易に理解できるのです。彼らにお世辞も皮肉も謙譲の美德も社交辞令も通用しません。

韓国における安重根の英雄化、聖人化は、戦後になつて進められたものであり、そこには日本人の安重根觀が多分に影響しているという私の主張はご理解いただけたかと思います。つまり、「義士・安重根」像は韓国と日本の合作だったともいえるのです。さらにはこのなら、韓国では抗日英雄でさえ日本というフィルターを通してしか創造することができなかつたということになります。

そういうえば、金嬉老も釈放後、「差別と戦つた民族英雄」として韓国に迎えられ、政府の補助のもと悠々自適の生活を送つていてるという報は日本にも届きました。もちろん、「差別と戦つた」というのは多分に日本のマスコミによつて作られたイメージです。その金嬉老が帰国後の祖国で何をやつたかといえば、姦通（不倫）と殺人未遂、それに放火という重犯罪でした。

## 明治期に再評価された李舜臣

韓国で安重根と並ぶ超級クラスの抗日民族英雄といえば、「文禄・慶長の役において朝鮮水軍を率いて秀吉軍を返り討ちにした」と伝説化されている李舜臣<sup>イスンシン</sup>將軍の名が浮かびます。釜山市には日本の方角を睨む形で巨大な李舜臣の銅像が建つており、また近年ではサッカーの日韓戦では韓国側の観客スタンドに安重根とともに李舜臣の肖像画が描かれた横断幕が翻るのが恒例となっているようです。

安重根同様、李舜臣も映像作品などを通して虚実ないまぜの英雄像がいつの間にか定着して今日にいたっています。何年か前ですが、韓国の研究家が、李舜臣水軍の亀甲船の実物大モデルを復元（？）し海に浮かべたところ、またたく間に沈んでしまったこともあります。

実はこの李舜臣將軍、朝鮮では近代になるまですっかりと忘れられた存在であり、彼の再評価が起きたのは、明治のころの日本だったのです。

李舜臣の名は、それを遡る江戸時代の戦争講談本『朝鮮太平記』、『朝鮮征伐記』などに鋼鉄の敵将として登場しています。これらに描かれる李將軍は堂々たる巨躯の持ち主で、日本軍の鐵砲の弾を腕に受けても平然としている怪人です。敵を強大に描くのは、いわゆる劇的な効果を狙つたものだと思われますが、それが後世の李舜臣像に多大な影響を与えたのは想像に難くありません。

## 安重根の勘違い

安重根に戻つて、私個人の評価として彼を見た場合、せいぜい森の石松といった役どころがいいところなのです。「馬鹿は死ななきや治らない」と浪曲で歌われる森の石松は、おつちよこちよいの早とちりで向こう見ず。そのくせ、正義感が強く曲がったことと嘘が嫌いで、何よりも次郎長親分に対する忠誠心は人一倍強い、愛すべきキャラクターです。

もし、石松が刑事案件を起こして収監され、私が看守として彼に接する立場でしたとしても、彼の真つ正直な人柄に自然と惚れ込んでいたことでしょう。そして、その一本気な性格を別の方面で活かしたならば、さぞかし立派な仕事をなしだらうと惜しむばかりだと思いま

す。安重根もそういった人間的魅力のある人物であったとは推測されます。

安の石松ぶり（おつちよこちよいぶり）は、彼が公判中に主張したという、例の「伊藤博文殺害の15の理由」にも顕著に現れています。

安は理由の1として、伊藤を閔妃殺害の首謀者であるとしていますが、誰に吹き込まれたかは知りませんが、これはまつたくもつて早とちりの勘違い。確かに伊藤内閣の時代の事件ではあるものの、大院君の意を汲んだ禹範善訓練隊隊長とその一味の犯行であることは明らかで、何よりも禹範善本人がこれを認めしており、それを理由に彼自身も殺害されているのです。現場にいた数少ない目撃者で閔妃の王子であつた純宗も禹範善の犯行であることを証言しているのでこれは間違いではないでしよう。禹範善一味の乱を黙認していたということでいえば、三浦梧樓公使も広い意味の共同正犯と言えるし、亂に日本人浪士が加担していた可能性は否定できませんが、この事件に伊藤が一切の関与をしていないのは明白です。

また、安は、理由の14に、伊藤が孝明天皇を毒殺したことを持げています。これも彼の早とちりです。それにしても韓国人である安が日本の天皇の敵討ちをなぜやろうと思いつたのか、それこそ彼の皇室に対する尊崇の念を現す証左ではないでしょうか。

## イメージ・ロンダリングされる悪女閔妃

まず日本で再評価され、逆輸入の形で韓国国内で取り上げられ抗日英雄として神格化されていく、どうやらこのパターンが見えてきました。現在韓国で、李舜臣、安重根に統いて抗日の聖像化が進んでいる歴史上の人物がいます。今言つた閔妃の登場です。

閔妃は夫である朝鮮王・高宗を尻目に、國を私物化し閔一族の榮達のみを願つてひたすら國庫を浪費して朝鮮を亡国へ導いた傾城の愚女でした。舅である大院君とは血で血を洗う抗争を繰り広げ、あまつさえ、清、日、露と事大先を変えたために政情はそのつど大混乱を極めます。彼女がいなければ、日清日露戦争も起こらず、つまりは日本の青年の血も流れず、ひいては日韓併合もなかつたかもしません。まさに亡国の王妃、天下の悪女につきました。

おそらく、70年代までの韓国での一般的な彼女の評価はそれ以上でもそれ以下でもなかつたのは確かです。当時の劇映画に登場する閔妃の悪女然としたキャラクターからもそれが伺い知れます。

戦後韓国で作られた閔妃モノ映画の第一号は『大院君と閔妃』(59年)ですが、代表的なものといえば何といっても申相玉総指揮、林元植監督の『清日戦争と女傑閔妃』(65年)です。タイトルからして『明治天皇と日露大戦争』(56年)、『天皇・皇后と日清戦争』(58年)といつた一連の新東宝・アラカン天皇モノにインスピライされたであろう、シネマスコープ、オール

キャストの史劇巨編で、ここで描かれる閔妃は文字通りの女傑、女独裁者でした。プロデューサーの申相玉氏は、同作品の閔妃役で、夫人でもある女優の崔銀姬とともにのちに北朝鮮に拉致され、**金正日**<sup>キム・ジョンイル</sup>の大号令のもと、東宝の特撮スタッフとともに怪獣映画『プリガサリ』を撮つたことで日本でも一部で有名な、韓国映画界の巨人です。

70年代になると、閔妃モノと武侠（剣劇）モノを合体させた『閔妃の魔剣』（70年）なる珍品まで作られています。監督は『女傑閔妃』と同じく林元植で、閔妃を演じたのは吳樹美でした。『景福宮の女たち』（71年）での閔妃は、高宗の寵愛を受ける側室をイビリ倒したりの徹底的な憎まれ役で、むしろ彼女と敵対する大院君が好意的に描かれています。最後は、閔妃が殺され、高宗は後宮を追われた愛妾と再会してのハッピー・エンドです。どちらにしても、閔妃はあまりいい描かれ方はしていません。

ところが、80年代以降、韓国ではこの閔妃に関して「誇り高く慈悲深い国母」、「日帝の飢狼によつて殺害された悲劇の王妃」というそれまでとはおよそ正反対の評価が起つてているのです。例によつて映画やドラマといったフィクション先行ですが、近年、閔妃が映像作品で登場するたびにイメージ・ロンダリング（印象の浄化）がなされていきました。2002年、韓国KBSで制作され、日本の衛星放送チャンネルでも放映された『明成皇后』では、時代に翻弄されつつも鉄の意志をもつて生きた誇り高い女性として閔妃が描かれています。ちなみに「明成皇后」は彼女の諡号です。同ドラマの日本版HPにはこうあります――。

『明成皇后』は、ある意味、朝鮮近代史においてもつとも象徴的な人物だと言えよう。俗に言う『閔妃』という呼称は、『明成皇后』を卑下した呼び方で、当時の日本帝国主義が、植民地史観に基づいて付けたものだ。』『明成皇后』に関する多くの否定的な認識は、帝国主義の日本政府が、明成皇后を弑逆<sup>しぎやく</sup>して朝鮮を強制的に占領した事実を正当化するために作り出した、歴史の捏造と偽造に起因するものが大部分を占める。「権力に執着した女」、「国家の利益を犠牲にして、親族の利益を図つた女」、「闘争心と気まぐれにまみれた女」、これらはすべて、明成皇后を弑逆した当時の日本の名分である。』『鉄の女=明成皇后』。彼女の偉大さは、日本の初代総理大臣伊藤博文が漏らした、「朝鮮を侵略するためには朝鮮の国母を弑逆するほかない」という嘆息に含蓄されている。

もちろん、ここに書かれていることはすべて史実に反します。「権力に執着した女」、「国家の利益を犠牲にして、親族の利益を図つた女」、「闘争心と気まぐれにまみれた女」こそ、史実にそつた彼女の正しい評価なのです。そもそも閔妃という呼び方は「閔氏出身の后」という意味で、これに卑下のニュアンスはありません。近代以前、中国でも朝鮮でも女子の正式な名前は記録されませんでした。有名な楊貴妃は、「楊氏出身の貴妃」という意味です。もちろん、併合反対論者だった伊藤博文が「朝鮮を侵略するためには朝鮮の国母を弑逆するほかない」と言つたなどというのはまったくのデータラメです。

ドラマと前後してミュージカル『明成皇后』（海外タイトルは The last empress）が制作さ

れました。これは海を渡り、ロンドンでも公演されましたが、ファースト場面で舞台のバックスクリーンに、閔妃とは何の関係もない広島の原爆投下の映像が映し出され、現地の観客をドン引きさせたといいます。制作者の意図としては、日本への原爆投下は閔妃暗殺の報い、とも訴えたかったのでしょうか。原爆はこのように、懲罰という意味を込めて韓国が日本に対する嫌がらせによく使うタームです。

## すべては一冊の本から

さて、こういった「国母」「悲劇の王妃」といった閔妃の新解釈は、一体どこから生まれてきたのでしょうか。

加耶大学校客員教授の崔基鎬氏チエケイホが著書『韓国堕落の2000年史』(祥伝社・2001年)の中でこう記しています。

『日本のおろかな女性作家が、閔妃に同情的な本を書いたことがあるが、閔妃は義父に背恩したうえに、民衆を塗炭の苦しみにあわせ、国費を浪費して国を滅ぼしたおぞましい女である。このような韓国史に対する無知が、かえつて日韓関係を歪めてきたことを知るべきである。』

崔氏ははつきりとは述べていませんが、日本の女性作家が書いた閔妃に同情的な本とは、角

田房子著『閔妃暗殺—朝鮮王朝末期の国母』(新潮社・1988年)であることは明白です。同書では、閔妃と大院君の権力闘争に多くのページを割いてはいますが、閔妃殺害を三浦公使の単独計画と決定づけ、日本人の贖罪感に訴えかけるに充分な内容でした。「悲劇の王妃」というイメージはこの本によって韓国に伝播伝わるしたものと思われます。

そのイメージが定着するにしたがって、韓国では「閔妃」という呼び名を嫌い「明成皇后」を正式呼称にしようという動きが起こりましたが、先もいつたとおり、○○皇后というのは諱号（高貴な人に死後送られる名前）ですから、生前の閔妃に「明成皇后さま」と呼びかけるのはおかしなことです。

## 日本の女性皇族に対する屈折した思い

百歩譲って暗殺という手段でこの世を去った閔妃を「悲劇の王妃」とすることはよしとしても、その悲劇性を強調するあまり、韓国では彼女が死後、日本浪人によって遺体を陵辱されたという風説がまことしやかに流されていると聞いたら、読者はどう思われるでしょうか。むろん、まったくの作り話なのですが、ここまでくると「悲劇の王妃」のイメージを肥大化させるというよりも、むしろ死者に対する冒涜であり、閔妃に対する同情心はゼロに近い私でもさすが

に不快感を禁じ得ません。

この人騒がせな風説の出所は、<sup>キンジンミヨン</sup>金辰明なる男の書いた『皇太子妃拉致事件』(01年)という通俗小説であることが明らかになっています。金氏はこれまでに、南北朝鮮が共同で核ミサイルを開発、日本に撃ち込むという内容の『ムクゲノ花咲キマシタ』(93年)で400万部の国内ベストセラーを記録した、反日トンデモ小説の草分け的存在ですが、『皇太子妃拉致事件』ではそのトンデモ度はさらにパワー・アップしています。

野平俊水著『日本人はビックリ！韓国人の日本偽史』(小学館文庫)に、あらすじが紹介されていますので、さらにそれを要約しておきます。

――200×年、日本では「新しい教科書をつくる会」編纂の歴史教科書が検定を通過し、日韓の間で大きな外交問題となっていた。そんなある日、歌舞伎座に芝居見物に来ていたオワダ・マサコ皇太子妃が何者かに拉致される大事件が起こる。韓国人留学生・金イスを中心とする拉致実行犯グループは、新聞廣告を通して、日本政府に対して、駐大韓帝国日本公使館が1895年(明治28年)に日本に送った「電文435号」を公開すれば皇太子妃を解放するという要求をする――

ここまで読んだだけで、頭の中がクラクラした人がほとんどでしょう。中には怒りがこみ上げてきたという人、思わず笑ってしまった人もいるかもしれません。しかし、これで驚いていいではありません。問題は「電文435号」の中身なのです。

――電文の内容は閔妃暗殺事件に絡むものだつた。日本の浪人が閔妃の死体を屍姦し、これを隠蔽するため死体焼却したことが克明に報告されているのだつた。日本政府が公表を拒む中、独自に電文を入手したマサコ皇太子妃は大いに衝撃を受け、この電文を手にユネスコの教科書審査(但馬註・そんなものがあるなど初耳です)に参加し、歴史的事実を明らかにする。皇太子妃の勇気ある活躍で、日本人の残虐性と歴史歪曲が世界の知るところとなり、歴史修正を企む「新しい教科書をつくる会」の野望はついえるのだった――

どうでしょう。私自身、開いた口が閉まるまでに小一時間はかかってしまいました。ちなみにこの小説には、徳仁皇太子殿下、中曾根康弘元首相を始め、藤岡信勝「つくる会」代表、黒田勝弘産経新聞ソウル支局長が実名で登場するのだそうです。

ちなみに、韓国では日本の天皇陛下を日王といつて蔑みますが、なぜか女性皇族に関しては奇妙な憚があるようで、反日トンデモ小説にはたびたび善意の存在として登場します。2002年(平成14年)、チヨン・ソンヒヨクなる浪人生が書き上げ、在韓日本大使に贈ったことで話題になつた『百濟書記』という小説では、ハーバード大に留学中の愛子内親王(なぜかジヤクリーンという英名をもつてゐる)が、韓国人青年・余ミンヒヨク(実は百濟王の末裔)と恋に落ち、その過程で「正しい歴史認識」を知るというストーリーでした。内容のバカバカしさはともかく、韓国のトンデモ小説にある種のパターンがあることがよくわかります。

彼らにとつて「歴史認識」とは日韓で研究し確認し合うものではなく、自分たちが「教えて

やる」ものなのです。こちらの小説にも、実在する和田春樹東大名譽教授（韓国側がいわゆる「良心的日本人」に認定する学者の一人）が実名で登場します。

話を戻しましょう。何度も言いますが、死体を辱めるのは支那や朝鮮の文化です。現に、閔氏政権打倒のクー・データーを指揮したものの三日天下に終わり、閔妃の放った刺客に謀殺された開明派の志士・金玉均<sup>キム・オソクユン</sup>の遺体は四肢を切断されたのち朝鮮各地に野ざらしにされ、彼の妻は奴婢階級に落とされました。これが「慈悲深い国母」とやらが政敵に對して行つた仕打ちなのです。

ちなみに、福沢諭吉、頭山満らと深い友情で結ばれた金玉均の墓は東京の青山靈園にひつそりと建っています。彼もまた祖国の土になることは許されなかつたのです。

### 閔妃屍姦伝説の出どころ

金辰明の閔妃屍姦説は今や一人歩きし、「事実」として喧伝されつつあります。由々しきかぎりですが、ファイクションの日帝残酷話が伝言ゲームを通して潤色され、やがて「事実」として世界中にばら撒かれるというのは、慰安婦問題を見るまでもなく、韓国の反日プロパガンダの定型パターンでもあります。

野平氏が「電文435号」の信憑性について金辰明氏に直接聞いたところ、金氏は「電文435号」という名称および内容は自身の創作であることを認めながらも、屍姦説の根拠となつたのは、角田房子氏の『閔妃暗殺』の記述であると言張つたといいます。『閔妃暗殺』には『さらに閔妃の遺体のそばにいた日本人の中に、同胞として私には書くに堪えない行為があつたことが報告されている。もと法制局参事官で、当時朝鮮政府の内部顧問官であった石塚英蔵は、法制局官末松兼澄あての報告書のなかに「誠にこれを筆にするに忍びないが」と前置きした上で、その行為を具体的に書いている。』とあり、金氏の「根拠」とはこの記述のことを指すと思われますが、肝心の角田氏も著書の中で「具体的な行為」に関しては一切触れていません。野平氏も角田氏に書簡を通して確認したところ、石塚英蔵の報告書のどこにも「屍姦を行つた」という記述はなかつたという回答を得、後年、国立国会図書館憲政資料館で件の文書（「朝鮮王妃事件関係資料」石塚英蔵書簡）にあたり、やはりそのような記述はなかつたとしています。

以下がその該当部分です。

《殊ニ野次馬連ハ深ク内部ニ入込み、王妃ヲ引キ出シ二三ヶ処刃傷ニ及ヒ且ツ裸体トシ局部検査（可笑又可怒）ヲ為シ最後ニ油ヲ注ギ焼失セル等誠ニ之ヲ筆ニスルニ忍ヒサルナリ／其他宮内大臣ハ頗ル残酷ナル方法ヲ以テ殺害シタリト云フ／右ハ士官モ手伝ヘタリ共主トシテ兵士外日本人ノ所為ニ係ルモノノ如シ。》

(事件後)野次馬が宮殿に押し入り閔妃を裸にして「笑つたり怒号したりしながら」局部を検査したあと、油をかけて遺体を焼いたと読めます。このどこにも「屍姦をした」ということは書かれていません。「野次馬」とあるのは、朝鮮人であると思われます。つまり、朝鮮人野次馬が、憎つき女独裁者の遺体をいたずらしてウサを晴らしたという話が真相のようです。これだある程度、つじつまが合います。

つまるところ、金辰明氏は、角田氏が、「閔妃に同情的な本」にも書くのを済はした「具体的な行為」に、下世話きわまる想像力を巡らし、「屍姦」をデツチ上げたということのようです。以下は、野平氏の著書に紹介されている『皇太子妃拉致事件』の電文435号「閔妃屍姦」の下りです(野平氏訳)。孫引きであることをお断りして、ここに記しておきます。

『浪人たちは閔妃の下着を剥ぎました。一人の浪人が全裸にした王妃の陰部を……人数は確認できませんが何人かの浪人が結局はズボンを脱いで性器を取り出し王妃の白く麗しい体に……精液で汚された王妃を前にして浪人たちは大日本帝国万歳を叫びました。』

はなはだ獣奇性の強い、ポルノとしてもかなり特殊なマニア層向けの書物に出てきそうなアブノーマルな描写といえます。被害者意識を煽り、読者の反日感情を増幅させるのが目的としても、彼らのいうところの「国母」(ー)の遺体を強姦させるというのですから、たとえフィクションであっても、いやフィクションならばこそ、創作者の異様な想像力に声も出ません。これも韓国人の日本に対する潜在的なマゾヒズム願望であると解釈するべきなのでしょうか。

### 閔妃の墓に土下座させられた日本人

韓国の反日の多くは実は日本で作られてきたのです。

安重根も李舜臣もまず日本人が、過ぎる評価を与え、それが韓国に渡り、さらなるお色直しがほどこされ、あるいはまったく正反対の功績が書き加えられ、抗日のイコンとなつていきました。閔妃も今この星座に加わろうとしています。安重根や李舜臣は憎き日本に一矢報いたという意味でSKのイコンで、「悲劇の王妃」はCKのイコンです。日韓合作の最強の反日イコンといえば、いわゆる『従軍慰安婦』につきますが、女性であるという点でいえば、閔妃のケースもこちらに近いでしょう。片や「性奴隸」片や「屍姦」です。

「明成皇后を考える会」なる奇怪な集団があります。熊本県の元・現職教師で構成されたという同会は、閔妃事件の日本側実行犯の後裔を捜し出して閔妃記録を調査、殺害事件の真相究明を目的としている会であるとして、2004年(平成16年)に結成。2005年(平成17年)から毎年、10月8日の閔妃の命日に合わせ韓国を訪問、閔妃の生家や墓所を訪れ「謝罪」パフォーマンスを続けているとのことです。

2005年5月には韓国のドキュメンタリー番組制作会社の招きで、閔妃殺害の実行犯(國友重章・家入嘉吉)の子孫とされる男女を連れ訪韓、閔妃の墓所で土下座して謝罪するところを撮影させました。その模様はテレビ朝日系の『報道ステーション』でも報道され、私も見ま

したが、不快極まりないものでした。墓所についた「子孫」二人を待っていたのはカメラの放列で、しかもそれはひざまづく一人を真正面から捉えており、明らかに晒し者にすることを前提にあらかじめセッティングされていたのは歴然でした。もはやこれは人権侵害です。

女性の方が桜色の訪問着（和服）を着ていたところを見ると、単なる、閔妃の子孫との和解という名目で「考える会」に呼ばれた可能性もあります。閔妃の曾孫と称する人物が、涙ながらに謝罪する一人に向かって「謝罪を受ける、受けないは、自分がすることではない。政府レベルの謝罪がなければならない」と言い放つたことも、非常に胸糞の悪い気持ちにさせられたものです。どうも、彼らは新たな外交問題にしたいようです。

先ほど紹介した伊藤文吉と安俊生の対面と比較してみてください。この二つの「対面」は、ともに政治的演出（アレンジメント）のともなつたものであつたかもしませんが、日韓のそれでは、受ける印象がこれほどに違うのです。あのとき、うなだれる一人にシャツターポンと罵声を浴びせた韓国人記者の中には、彼らを閔妃の遺体を陵辱した悪鬼の血を引く憎い日本人と信じていた者もいたことでしょう。

では彼ら二人のご先祖さま、国友重章と家入嘉吉は本当に閔妃殺害の実行犯だったのでしょうか。国友は当時朝鮮で新聞記者をしていたアジア主義者で、確かに閔妃殺害事件においては関係者として連座し広島で投獄されますが、三浦公使らとともに証拠不十分で不起訴となっています。家入嘉吉に関しては朝鮮で日本語教師をしていたらしいのですが、事件にどれほど関

与したかはまったくの不明です。推定無罪、しかも100年以上も前のことです。さらにいえば、たとえ犯人であつてもその子孫が罪を負うということは日本人の感覚にはありません。

三浦公使が閔妃排斥を念頭に反閔妃派と裏で手を組んでいたのは事実でしょう。彼女をこのまま野放しにしていたら、いずれ朝鮮はロシアに呑まれてしまふのは必至という判断が働いていたのは当時の状況からも充分納得できることです。

では、朝鮮側で閔妃排斥を願っていたのは誰か。志半ばで殺されてしましましたが、金玉均がまずそうでした。閔妃に捨てられ職を失つた旧軍隊の怒りも凄まじいものがありました。しかし、何といつても閔妃憎しで凝り固まつていたのは大院君です。いや、それだけではあります。苛斂<sup>かれんちう</sup>誅求<sup>さくしゅう</sup>に苦しむ国民すべての怨嗟<sup>えんさ</sup>のものが彼女だったのです。閔妃暗殺とは、そういつた複雑なベクトルが一点に集中して起こつた歴史の大事件でした。

現代の感覚からすれば、暗殺という手段を決して認めるとはできません。しかし、暗殺という非常手段を用いなければ、世を動かせなかつた時代も確かにあつたのです。

伊藤博文も閔妃も暗殺によつて命を奪われました。しかし、韓国民にとって、どちらの暗殺が真に有益だったか、誰が眞の意味での義士であつたか、彼らが答えを出すには、まだもう少し時間が必要なのかもしれません。

歴史上に絶対の悪は存在しないと信じます。閔妃の冥福を祈る心は私にもあります。しかし、彼女を聖女にすることは絶対に許されないことなのです。

# 踏みにじらなかつたから恨まれている日本？／逆説の日本植民地支配史

## 踏みつけて支配しなかつた日本

憲政史研究家の倉山満氏が、「週刊SPA！」のネット版、「日刊SPA！」（2013年11月22日付）に「朝鮮人を人間扱いしたから大日本帝国は滅びた」と題してこんな談話を発表されています。

『安重根が伊藤博文を恩かにも暗殺したことが日韓併合の引き金になつたのですが、そもそも日本は植民地を持つ資格がなかつたのです。なぜか？ それは日本人が朝鮮人を人間扱いするほど『甘かつた』からです。』『そもそも植民地とは何かというと、搾取する土地です。朝鮮半島に搾り取る資源があつたのかというと、何もありませんでした。そんな土地を生真面目な日本人は『貨幣経済を浸透させよう』『文明化しなければならない』『インフラを整えよう』と使命感に燃え、やりとげてしまつた』。その結果、『日本は帝国臣民である朝鮮人の権利を守るために、中華民国と対峙することになり、満洲事変、支那事変と戦線を拡大し、大陸経営へと深入りして破滅していくのです』と倉山氏は指摘しています。

タイトルを含め、なかなか衝撃的な内容ですが、これを読んだとき、わが意を得たりと大いに膝を叩いたものでした。その上で倉山氏の言葉に私なりの言葉を付け加えさせていただくなら、以下につきます。

「朝鮮人を支配するには、地べたに土下座させて、その頭に全体重を乗せて踏みにじるような高圧的な態度、徹底した恐怖による統治を用いなければならない」。

これを読んで「何てひどい」というのだ」「お前は差別主義者か」と声を荒げる方もいるかと思います。私も同感です。確かに「ひどい」言葉ですね。そう言われて、私はへこむどころか、むしろ嬉しいのです。なぜなら、私のこの言葉を「ひどい」と思うあなたは、実に日本人的優しさと倫理観に満ちた人だと思うからです。そして、それが日本人のスタンダードな意見であるといたいし、私もその日本人の端くれでいたいと強く思うのです。

日本は、朝鮮に対して「恐怖による統治」を行わなかつた、いや日本人の精神性、倫理観からしてそれは行えなかつたという方が正確かもしれません。朝鮮人を新しい同胞、四海のはらからとして迎え入れ、内地の人間とできるだけ対等に扱つた。教育もほどこしたし、インフラも整備し、保健衛生も根付かせた。——だからこそ、恨まれるのです。これは決して逆説でも皮肉でもありません。徹底した恐怖心を植え付けなかつたゆえに、彼らは戦後、安心して反日政策を掲げられたのです。つまり、日本の朝鮮統治は失敗だったのです。

一方、朝鮮民族の特性（仮面性マゾ）をよく知る支那の歴代王朝は、ぬかりなく彼らを支配しました。それこそ土下座した頭を思い切り踏みにじり、徹底的な恐怖でもつて宗主国として

の優位性を骨身に沁みる形で朝鮮民族に叩き込んだのです。いわば、調教です。農耕民族である日本人にはこの調教という発想 자체がなかつたといえます。つまり、他民族に対してサディストになりきれなかつたということです。

## 独立門と迎恩門

ソウル市の西大门独立公園内に御影石を積み上げて作られた「独立門」という石門があります。近年、この門を日本からの独立を記念して建てられたものと誤解している韓国の若者も多いのですが、事実は清国からの独立を記念して1887年（明治20年）にこの地に建てられたものです。その清国からの独立は、日本が日清戦争で勝利し、清国に下関条約（第一条が、朝鮮の独立の確認）を認めさせたことによつて成し遂げました。つまり、日本の若者の血と引き換えて朝鮮の独立があつたのです。

さて、その独立門が建てられる前、同じ場所に迎恩門という門があつたということを、どれだけ現在の韓国の若者が知つてゐるでしょうか。どのような性質のものであるかといえば、朝鮮国王が清国からの使者を「三跪九叩頭の礼」で迎えるための門でした。三跪九叩頭拝とはその名の通り、頭を地面に3度叩きつけるようにこすりつけ、それを3セット、つまり都合9

回、土下座を繰り返す支那式の臣下の礼です。百歩譲つて清の皇帝に朝鮮王が臣下の礼を取るというならまだ理解もできる余地があるかもしませんが、やつてくるのは、単なる皇帝の「お使い」です。いわば、親会社の平社員に、下請け会社の社長が土下座をさせられるようなもの、といつてもまだ足りないでしよう。

その「お使い」の中には清王朝の役人に出世した朝鮮出身の宦官もいたともいわれています。どういうことかといいますと、産業の立ち遅れた朝鮮には大清帝国のお眼鏡にかなうような貢物がありませんでした。仕方がなく、美女と少年を貢物として献上していたのです。美女は両班の子女から選ばれました。この貢女のならわしは、清国に限らず朝鮮が冊封していた歴代支那王朝すべてに対して行われており、いうならば、朝鮮の歴史とは他民族に同胞の女を差し出すことで成り立つていた、能動的『寝取られ』文化の歴史でもあるということです。一方、少年たちは去勢され宦官として清国に送られました。その宦官が皇帝の勅使となつてかつての祖国にやつてきたのです。

幼い自分の性を奪つて貢物として異国に捧げた国王、本来だつたら仰ぎ見ることもできない存在だった母国の王が、今、自分の足元にひれ伏している……宦官の目に、王の姿があるいは自分を捨てた祖国の姿がどのように映つたことでしょうか。たかが宦官風情を前に地面に額をこすりつけて礼を尽くさなければならぬ朝鮮王の心境もいかほどのものか、想像してみてください。

『朝鮮出身の宦官は、宗主国<sup>カントク</sup>の勅使<sup>カシキ</sup>という地位を利用して、朝鮮国王に圧力をかけ、賄賂を要求し、高麗宦官康完者<sup>カンクンツオトオ</sup>（篤）のように、その兄康儒を戸曹判書<sup>トウサバンブ</sup>という高官につけた以外に、親戚一族の六百三十四人を官職につけた例もある。宦官出身地の府群県の昇格を要求することさえあり、逆に朝鮮国王をゆすりたかり、朝鮮の政治に強い影響を与えた。』（黄文雄著『立ち直れない韓国』光文社）

朝鮮国王よりも支那の役人となつた朝鮮出身の宦官の方がずっと地位は高かつたことがおわかりになるかと思います。

支那王朝はまさしく、土下座をした頭を踏みつけるような態度でもつて徹底的な屈辱を味わわせることで朝鮮国を支配していたのです。

### 日本に李朝お取り潰しの意思はなかつた

韓国人はよく日韓併合の36年を「人類史上類例のない過酷な植民地支配」と表現してはばかりません。なかなかブンガク的な表現なのですが、「人類史上類例のない」という限りは、日本はこの清国式のやり方よりさらに数倍は屈辱的な臣下の礼を朝鮮国王や大臣に要求していたと考えるのが妥当というものです。少なくとも韓国の言い分だけを聞いた第二国の人々はどう思ふでしょうか。

そう思うはずです。

しかし、事実はまったく違います。明治天皇を始め、初代朝鮮統監の伊藤博文も初代総督の寺内正毅も日本人の誰一人も、朝鮮王だった高宗やその嫡男でやはり王に即位した純宗に三跪九叩頭拝を求めたりはしませんでした。それどころか、純宗の後継に選ばれた英親王（李垠）を日本に留学させて、昭和天皇のお妃候補と有力視されていたこともある皇族・梨本宮方子妃殿下を嫁がせ、朝鮮王朝を日本の皇族の親戚として遇しているのです。ある国が他国の支配を受けたとき、それまでの王朝が根絶やしにされ、あるいは指導者が処刑されるということが普通だつた時代に、です。

もちろん、日本の韓国統治のすべてがよかつたとはいいません。民族のプライドを傷つけるような無神経な政策もあったことでしょう。威張り散らすだけの官吏もいたかもしれません。李垠殿下の成婚も確かに政略結婚といえます。しかし、日本の統治の目的が朝鮮民族の抹殺でも朝鮮王朝の滅亡でなかつたということはまぎれもない歴史の事実なのです。

### 西欧式植民地統治とは違つた日韓併合

家帰属に関する特別法) が施行されました。この法律の第1条の目的の項にはこうあります。

「日本帝国主義の殖民統治に協力し、わが民族を弾圧した反民族行為者が、その当時、蓄財した財産を国家の所有とすることで、正義を具現し、民族精気を打ち立てることを目的とする」。つまり、併合時代、日本や総督府の政策に協力し、一定以上の蓄財をした者の子孫から財産を没収するというものです。いうまでもなく、近代法原則の廻及法の禁止、連座制の禁止に抵触します。この法律の成立を押し進めたのが、弁護士出身の大統領・盧武鉉であるという事実があの国の後進性をよく表しているといえましょう。法治国家ですらないことを大統領自ら証明したに等しいといえます。まさしく中世の魔女狩りが隣の国で始まっているのです。

ここでいう「親日派」の概念ですが、「日韓併合条約など、國權を侵害した條約を締結または調印したり、これを謀議した行為をした者、朝鮮貴族、貴族院・衆議院で活動した者、中法院副議長・參議・贊議・副贊議のように、親日の程度が大きい場合などを定め、定義する」(第2条第1号)とあります。爵位を受けたり内地の国会議員になつた者も「親日派」というレッテルを貼られ処断されるということです。2014年(平成26年)2月にも、併合時代、侯爵の爵位を受けた李海昇(イ・ヘソン)なる人物の子孫に土地売買で得た利益の全額を国庫に払えという判決が下っています。原告は親日反民族行為者財産調査委員会という政府組織で、いうならば現代の異端審問委員会といえます。

この法律や韓国司法の異常性についてはさておき、併合時代、朝鮮人でも日本の爵位を受け

華族になることも、選挙を通して日本の国会議員になることもできたという事実に注目してください。これが「人類史上類例のない過酷な植民地統治」の正体ならば、戦前インド人のイギリス王族やアフリカ系のフランス大統領ぐらい誕生していてもさしつかえないかと思うのですが。

## 階級と差別

植民地経営の老舗、大英帝国は分断統治という手法を得意としてきました。たとえば、マレー半島を植民地にしたとき、イギリス人がじかに統治せず、インド人や華僑を入植させ、彼らにマレー人を支配させたのです。この統治法の巧みなところは、被支配者であるマレー人の怨嗟がイギリス本国に向かわず、直接の支配層であるインド人や華僑に向かうということでした。

日本も朝鮮人に自治的な政府を作らせるのではなく、台湾人や満州人、華僑、あるいはボリネシア人を入植させ、彼らに統治させていればよかつたのでしょうか。そうすれば、韓国の人々の恨みは私たち日本には向かず、「人類史上類例のない過酷な統治」などとも言われず、今ごろ日本と韓国はアジア最大の友好国同士になつていたかもしません。

イギリスはまた、アフリカの植民地政策に部族間対立を巧みに利用しました。この場合、怨

嗟の矛先を内側に向けるのと同時に、部族が結束してイギリスに反抗することを予防する意味もありました。アフリカの各国で今もなお、部族問題や内戦が絶えないのは白人統治時代のこの政策が尾を引いているからに他なりません。そして、その紛争地域に武器を売つて儲けているのがやはり白人さまと……最近はこれに中国さまが加わりました。またインドのカースト間の対立の構はむしろ、イギリス支配期により深くなつたともいわれます。

朝鮮は、両班という貴族階級を頂点とする徹底的な階級社会で、三国時代から引きずる伝統的地域対立を抱える国であることぐらいは統治側の朝鮮総督府も百も承知だつたろうに、これを利用しようという知恵はありませんでした。

ここで朝鮮の階級について少し説明しておきます。李朝時代、朝鮮では上から、両班、中民、常民、奴婢ノビという厳格な身分制度が敷かれていました。実質の支配者層であるのが両班で、これは簡単にいえば、科挙における文科と武科の合格者の家系（男子直系）を意味します。文官と武官の二つの班ですなわち両班です。国王は儀式などでは南の方角に向かつて官僚に面していましたが、国王に向かつて右側つまり東側に文官、西側に武官が座していたのでそれぞれ東班、西班という呼び方もありました。文官も武官も並列のように見えて、実際のところ、武官の地位は文官に比べてはなはだしく低かったのです。書を読み空論にふけることを貴人の本分としたことによるもので、この文（官）を偏重し武（官）を軽んじる風潮が、そのまま彼らの日本に対する潜在的侮蔑意識につながつているともいえます。ご承知のように、日本では武士

階級が長く支配層にありました。明治政府も事実上これを運営したのは薩長という地方武士集団でした。これだけをとっても、朝鮮から見れば、日本という国は文を忘れた民族、刀が支配する蛮人の國となることになるのです。

科挙には、文科、武科の他に、雑科という科目もありました。雑科とは、上の二科に該当しない特別な知識——医学や天文学、外国语（漢語や日本語）などを含む美学で、いうなれば、専門技能にあたります。この雑科合格者を多く輩出する階層が中民で社会的身分では両班と常民の中間にあたり、官位は低いですが、官職につくことができました。常民は一般的な農工商を営む庶民を指します。その下の奴婢は先にもいつた奴隸階級です。奴婢には人権はなく、金で売買され、その生殺与奪はすべて持ち主の胸先三寸で決まりました。李朝時代は奴婢の存在なしには下層労働が成り立たないという典型的な奴隸制社会だつたのです。

この他に、日本の被差別部落民に相当する白丁ペクチョンという人たちがいました。屠畜、食肉商、皮革業、柳工芸、葬礼などに従事し、さまざまな制度的差別を受ける反面、租税などは免除されていましたというのも日本の被差別民と共通しています。身分制度の最下層とされますが、むしろ、階級の外に置かれた人たちという説明の方がしつくりくるかもしれません。

日本はこの前近代的な階級国家である朝鮮に、明治政府のスローガンでもある四民平等の論理をそのまま移植し、奴婢や白丁を解放したのです。両班、中民が独裁していた学問の門戸を広げ、初級教育を徹底しました。

それがいけなかつたのかもしれません。「人類史上類例のない過酷な植民地統治」と、今も韓国に恨まれてしまう理由のひとつであると思います。いや、植民地統治に平等の概念を持ち込むことが「人類史上類例のない」実験だったのかもしれません。そして実験はもののみごとに失敗しました。その証拠に、併合時代の日本を一番恨んでいるのは、四民平等で数々の特権を奪われた旧両班階級だといわれています。反日を国是として大韓民国をテイク・オフさせた李承晩大統領は両班の出身でした。

### どこから見ても不可解な慰安婦問題

日本と韓国の間に横たわる問題の中でもつとも根深いもののひとつに慰安婦問題があります。近年、韓国は在米韓国人や留学生を使って、米各地に慰安婦の像や碑を建てたり、フランスの漫画祭に慰安婦を題材とした漫画を大量出展したり、慰安婦をユネスコに登録申請すると公言したり、この問題を日韓間の問題から国際問題へと拡大する戦略に出ています。明らかに慰安婦問題がさらなるステージを迎えたことを意味しているといえます。それに歴して日本は防戦一方といえましょう。

それはさておき、韓国およびその同調者の日本人は、「日本軍は官吏などと共に謀し、朝鮮半

島全土で、暴力あるいは甘言等を用いて無辜の少女を誘拐、多くは集団強姦などを経て各地の慰安所へ連行、兵士たちの性奴隸にした」と主張し、日本はそれに関して政府による賠償はおろか正式な謝罪もしていないと非難しています。そして、そのような強制的に慰安婦にされた女性は朝鮮半島だけで20万人に及ぶと言っているのですが、そのどれもが大嘘であると断言できます。

1944年（昭和19年）当時、朝鮮半島の人口は約2000万人でした。このうち半分を女性とすれば、1000万人。これは赤ちゃんからお婆ちゃんまで含めた全女性の数ですから、このうち15才から30才までを青春適齢期と考え、この年齢層を女性全体の半分と大雑把に計算して500万。その500万人のうちの20万人が強制連行の上に兵士の性奴隸にされたというのです。25人に1人、学校でいえばクラスのうち1人が2人の少女が、ある日突然、神隠しにあつたかのように行方不明になるのです。そのような謎の大量失踪事件を記録する記述や近親者の口述が一例も存在しないのは不思議極まりないことです。ちなみに併合時代の警察官のほとんどが朝鮮人でした。彼らはなぜ、この不可解な蒸発事件を捜査しようとしなかつたのでしょうか。

## 被征服者の女に種を残すという支配方法

話は変わります。1947～48年（昭和22～23年）、外地から復員兵が大量に日本に引き揚げてきました。生きて再び故郷の土を踏んだ彼らが、敗戦の悲哀を改めて実感した光景とは何だつたのでしょうか。一面の焼け野原、飢えた子供たち、O.P. Unit の看板……どれもがそうであつたでしようが、あくまで私見ということで言わせてもらえば、私は、パンパン・ガールと呼ばれる夜の女性たちの存在ではなかつたのかと思うのです。

……あの日、日の丸の小旗を振つて見送つてくれた銃後の乙女が、皇軍の妻が、今では唇を毒々しく赤く染め、片言のメリケン語を操りながら、かつての敵兵の腕にぶらさがつて、この現実を目の当たりにしたとき、男たちはすべてを悟り受け入れざるを得なかつたことでしょう。征服者に自國の女を奪われるという構図は、それほど強烈な心理的インパクトをもたらすということです。

女優・原節子がマッカーサーに見染められ、「お国のためならば」と泣く泣く愛人になつた、という都市伝説が生まれたのもこのころでした。これについては、芸能評論家の故・加東康一氏が自著『スキャンダルの昭和史』（話の特集）の中で「時の最高権力者に、有形無形に悩まされた側のささやかな抵抗精神が生んだデマ」と記しています。原節子といえば、『永遠の処女』と謳われた国民的女優、つまり日本女性の理想像がありました。それが占領軍の親分の愛す

人にさせられるというのですから、敗戦国民にとつての「抵抗精神」もかなり屈折したものがあるようです。一方で、やはり占領初期、「GHQに逆らつた日本人男子は全員、沖縄に連行され金玉を抜かれる」という噂がまことしやかに流布していたという話を、当時を知る年配の方から伺つことがあります。この二つの都市伝説は実はワンセットで考えるべきだらうと思うのです。

女を奪い、男を去勢する、つまりは、異民族の男性の性を奪い、女性には征服者の子種を植え付け、長い時間軸でもつて被征服民族のY染色体を消滅させ同化させるという支配の方法は、現在のチベットやウイグルが置かれている境遇を思うと、決して絵空事の恐怖ではありません。21世紀の現在でも、中国共産党の政策により、チベットの女性の多くが強制的に中国の内陸部へ移住させられ現地人の妻にされています。チベット人同士の夫婦の場合、妊娠した妻は強制墮胎され、刑罰として若者の断種だんしゅが公然と行われているのです。このまま行けば、50年を待たずして、純血のチベット人は地球から消滅してしまうともいわれています。恐ろしい限りです。ウイグル自治区でも同様のことを行っています。

## 戦場と強姦

この、被征服者に子種を植え付け混血させるという支配の方法をもつとも実践したのが、スペイン人でした。大航海時代、スペインは南米各地をキリスト教布教の名目で侵略しましたが、彼らはまたインディオとの間に多くのメスチソ（混血児）を残しています。メスチソは支配構造の中間層を形成し多くの要職を独占し、純血のインディオを自分たちの下位に置きました。彼らにとつて、支配者層のスペイン人は血統的な父親ですから、これに對して弓を引くということは基本的にありえませんでした。これもまた、形を変えた分断統治といえます。

征服した土地の女性に自分たちのY染色体を植え付ける、それに対する倫理上の是非はともかく、これの行動原理は実は本能レベルに組み込まれたものであるといつていいと思います。たとえば、靈長類の中で人間に次いで知能が高いといわれるピグミー・チンパンジーの世界では、群の中で新しいボスが誕生すると、その新しいボスは旧ボスが独占していた雌たちを襲い、目の前で子ザル（旧ボスの子）を噛み殺すのだそうです。雌はわが子が殺されるのを見て、怒り出すどころか、吹き出る血に興奮し発情が起こり、新ボスと交尾を始めるのだと（立花隆著『サル学の現在』平凡社）。同様の子殺しはライオンの群でも見られるといいます。

人間の場合、そういうたブリミティップな生殖衝動がもつとも顕著な形で出るのが戦場です。戦時やその後の占領時に、強姦が多発するのはそのためといつていいと思います。現にベトナ

ム戦争に参戦した韓国軍兵士の行くところ、強姦や火付けはもとより、赤ん坊殺しや妊婦の腹を割いての胎児殺しが多発したといいます。韓国軍兵士たちは戦時という非常事態の中で、ものみごとにピグミー・チンパンジーへ先祖還りしていたのです。

終戦直後の満州や北鮮、樺太でも同じような光景がありました。ソ連兵のお先棒となつた朝鮮人による在留邦人の婦人に對する強姦、殺害が多発したのです。福岡県筑紫郡一日市町にかつてあつた二日市保養所は、それらソ連兵や朝鮮人によって強姦された引揚げ子女の墮胎手術や性病治療を秘密裏に行つた医療施設です。現在、保養所の跡地には、小さな水子地蔵を祀る祠が建てられています。内地も同様で、「戦勝国民」を自称した朝鮮人が徒党を組み、日本の警察力が及ばないことをいいことに、強姦を始めさまざまな犯罪行為に手を染めていました。どうも朝鮮民族は、相手が弱者であると知れば、サディストの側面が徹底拡大されてしまうようです。逆に相手が強者である場合はマゾヒステイックなまでに卑屈な態度で恭順するのですから、かなり極端な精神構造を有しているといつても過言ではないでしょう。朝鮮人には恐怖でもつて統治するという支那人のやり方は、彼らのそういう性質を見抜いてのものだったのです。朝鮮人からすれば、日本人の唱える和の精神や平等概念など、「弱者の思想」「降伏の論理」に過ぎないのかもしれません。チャンスさえくれば、長年の支配の報復と称し、寝首をかくことは容易と思っていたふしさえあります。

## 強姦と虐殺は聖書の時代から

おつと、朝鮮人ばかりが残虐非道な殺人レイプ魔であるかのようないは誤解を招きかねませんね。私としても差別主義者と言わるのは本意ではありません。ならば、旧約聖書「民数記」の預言者モーセのこの言葉を紹介しておきましょう。ちなみに預言者（prophet）とは神の言葉を伝える人、つまり一種のシャーマンです。

『それで今、この子供たちのうち男の子をみな殺し、また男と寝て、男を知った女をみな殺しなさい。ただし、まだ男と寝ず、男を知らない娘はすべてあなたがたのために生かしておきなさい。』（31章17～18）

同様の記述は「士師記」にもあります。

『ヤバシ・ギラアデに行つて、その住民を、女、子供もろともざをもつて撃て。そしてこのようにしなければならない。すなわち男および男と寝た女はことごとく滅ぼさなければならない。』（21章11～12）

すなわち、神がユダヤの民に、異邦びと（異教徒）を戦いのうちに皆殺しにせよと命令しているのです。男は子供であろうと一人残らず根絶やしにしろと言い、男を知っている女も同じく殺せと言っています。非処女は異邦びとの子供（Y染色体）を宿しているかもしないので、これも徹底駆除しなければいけないというわけです。ただし、処女はお前たちの戦利品として

心ゆくまで弄ぶがよいと、ありがたい神サマの思召しです。時代は下つて、11～13世紀、聖地奪還に派遣された十字軍も、この神サマの教えを忠実に守りました。彼らは殺しつくし、奪いつくし、犯しつくしたのです。およそ人類の戦争の歴史の中で、これらは繰り返されてきたのでした。

とはいえ、現代の戦争において、どう理屈をこねても民間人の虐殺と強姦は重大な戦争犯罪です。慰安所というシステムが戦時におけるこういった戦時性犯罪の一一定の抑止力になつたことは否定できないと思います。1945年（昭和20年）8月30日、ダグラス・マッカーサーが厚木に到着して日本の占領政策がスタートしましたが、そのわずか10日間の間で米兵による強姦が1336件発生したと米軍関係資料に記録されています（アメリカ軍はヨーロッパ戦線でも2万件以上の強姦を行つていました）。慌てたGHQが、日本政府にRAA（慰安所）の設置を要請したほどでした。これら強姦の他、RAA、パンパンなどの商行為における交渉も含め、米兵と日本人女性の間に生まれた混血児は深刻な社会問題となつてきました。

「人類史上類例のない過酷な植民地支配」なるものが行われていたと仮定するならば、強姦、通婚を問わざもたらされた、かなりの数の日本人のY染色体をもつた子が半島に放置されたのではないかという当然の疑問もわきますが、これに関しては韓国政府による調査報告はおろか、証言すら出てきてはいません。不思議なことではありませんか。

実は、併合時、日本政府や総督府も内鮮一体のスローガンのもと、内地人と朝鮮人の通婚を

激励していました。しかし、それはどうも上手くいかなかつたようです。日本人が朝鮮人の配偶者を敬遠したのか、その逆か、両者の通婚は限定的なものに留まつたのが実情でした。

「アサヒグラフ」1953年（昭和28年）12月29日号に興味深い記事を見つけました。同号の特集は、李承晚ラインによつて拿捕され釜山収容所に抑留されている日本人漁民を取材したものです、収容所の別棟に600人近くの母子が収容されていることも小さく伝えています。母子は朝鮮人と結婚し、この地に残つた日本人妻とその子で、朝鮮動乱で夫を亡くした人たちでした。日本への帰還を希望する彼女たちを韓国政府はこのゲットーのような収容所に止め置きしているとのことで、その後、彼女たちが無事帰還船に乗れたかどうかは残念ながら不明です。これは余談ですが、戦後韓国で日本婦人会を主催し、祖国に帰ることのかなわなかつた日本人妻たちの心の拠りどころとなつて励まされてきたのが、先にも触れた李方子女史でした。

日本の朝鮮統治においては、日本人のY染色体を残すどころか、通婚においては圧倒的に朝鮮人夫と日本人妻の組み合わせが多かつたようです。これは世界の植民地の歴史においても珍しいケースかと思います。

## 妓生観光と韓流ブームの表裏

金芝河氏といえど、朴軍事政権時、民主化を訴え何度も投獄の憂き目にあつたことで知られる韓国を代表する反体制詩人です。その金氏に『糞氏物語』（1973年）という長編詩があります。これは、日本から親善団体の名目でやつてきた妓生観光団の団長がソウルにある李舜臣將軍の銅像のてっぺんによじ登り、大量のウンコを垂れ、やがてその団長も自分がひり出したウンコに飲まれて糞まみれになるという、諧謔に満ちた作品です。

妓生というのは言うまでもなく、韓国の芸妓で、ここではセックスを含む夜の相手をするプロの女性を指します。朴正熙軍事政権は、朝鮮戦争後の疲弊した国内経済を立て直すための外貨獲得を目的とした公営の妓生ハウスを設け、これを観光資源としました。要は公務員の売春婦です。その主客は日本人観光客でした。女性ファンション雑誌に韓国旅行の特集が組まれる近年では信じられることかもしれません、ほんのふた昔前までは、韓国旅行といえば、スケベ親父の買春ツアーと同義語といつても過言ではなかつたのです。

いくら外貨獲得のためとはいゝ、同胞の女たちが日本人相手に金で肌を許すという現実は受け入れがたいものだつたのでしよう。しかし、それを国家が推進しているというも一方の現実です。その屈折した思いが、日本人による李舜臣將軍の頭上で脱糞という表現に現れていました。韓国人らしからぬ、どこか自虐的な、ほろ苦い笑いをそこに感じますが、当の「日本人」

も自分の糞に飲まれて死んでしまうのですから、金氏にすれば、ここで一矢報いたというところでしょう。同胞の女が他国の男に抱かれることへの本能的な抵抗感をここにも感じます。先の原節子の都市伝説と比較してみるのも一興かもしません。

### 韓国の男あまり

韓国では結婚適齢期の男女比が大きくなり、既に統計上約19・6%、約2割の男性が結婚にあぶれるという数字がはじき出されています（京畿道家族女性研究院発表2009年）。男あまり社会と言わされて久しい日本でも9%台を超えたことがないという事実を見ると、その数は異常といえます。しかも、その原因は多分に人為的なものなのです。

韓国は近年、GDP世界第15位を誇り準先進国を自認していますが、先進国につきものの晚婚と少子化の問題も10年以上前から顕在化し始めています。超のつく学歴偏重社会であるこの国では、大学、それもソウル大、延世大、高麗大、成均館大の4大、女子では梨花大といった一流大学の出身者でないと就職もおぼつきません（今ではそれすら苦しくなっています）。それらエリート大学に入れるため、子供一人にかける教育費はかなりの額となります。英会話熱もさかんで、少しでも余裕のある家庭では、幼児のころから英会話を習わせます。将来子供

を海外留学させ、できることならアメリカやカナダの市民権を取らせて、いざれば自分たちを呼んでもらうのが中流韓国人の夢です。よほどの裕福層でなければ、3人も4人も子供をもうけることなど不可能なのが実情といえます。

そればかりではありません。根強い儒教文化の伝統から、長男夫婦は跡取りを生むことを親たちから半ば脅迫的に義務付けられるのです。妊娠した第一子が女の子であることが判明すると、多くの場合、夫の両親から陰に堕胎を迫られるといいます。実は韓国は、世界有数の中絶大国でもあるのです。かくして、生まれぬままに闇に葬られる女児はあとを絶たず、現在のいびつな男女比という結果がもたらされたのです。

韓流ブームの本質は、結婚にあぶれるだろう韓国人男性の配偶者として日本人女性をあてがうための国策だったのではないか、というのが私の見方です。キーセン観光も国策でしたが、日本人男性に同胞女性を抱かせるという屈辱的な記憶の意返しとしての、準先進国にふさわしい新しい国策である韓流ブームがあつたとも思えるのです。韓国人の若い男性の間で、「太極旗を立てる」といえば、日本女性と性行為をすることを意味する隠語だといいます。

## 日本になかった去勢文化

昨今、現代の日本の若い男性を指して「草食系男子」という言い方があるようで、韓流ブームの最中にもさんざん言われていました。「草食系の日本人男性より、何よりも積極的情熱的な韓国人男性がモテる」といった具合に。

確かに、被占領民を虐殺強姦し血と種の論理でもつて支配する統治スタイルを取れなかつたところを見ると、日本人は今も昔も草食系であるのかもしれません。そう思えば、むしろ、草食系であることに誇りすら感じても恥じることはないと思います。草食動物が弱々しく、被捕食者としての役割しかない生き物だというのも一面的な見方でしかありません。ライオンやヒョウだって、単体でゾウやサイを倒すことは容易なことではないでしょう。怪力を誇るゴリラも立派な草食動物です。

日本には去勢の文化がありませんでした。戦国時代、日本にやつてきた宣教師が驚いたのは、日本には去勢された牛馬がないことだったそうです。これをもつて、騎馬民族征服説の有力な反駁とする学者もいます。去勢の方法を知らない騎馬民族など考えられないからです。江戸時代、大奥という後宮が存在しましたが、一人の宦官もいませんでした。動物を去勢しないのですから、人間を去勢するなどという発想もなかったのです。

一方、先にも記したとおり、貢女と宦官は朝鮮が支那の歴代王朝に贈る大切な献上物でした。

## 男を戦闘にかり立てるもの

朝鮮には、両班女子の慰安婦と去勢した男子を自ら宗主国へ差し出していた、屈辱の歴史があるだけです。

戦争の際、男たちを奮い立たせ、その手に銃を持たせるのは、敵が同胞の婦女子を——わが妻、わが娘、わが妹、を犯し殺しにくるという恐怖とそれに対する絶対の怒りなのです。これはナショナリズムの言葉だけでは片付けることができない、オスの本能の部分だといえます。肉食獣も草食獣もこれに関しては同じです。

世界の国歌でもっとも好戦的な国歌のひとつといわれるフランス国歌「ラ・マルセイエーズ」の一節がそれを的確に言い表しています。この曲は本来、フランス革命政府による対オーストリア戦争のための軍歌でした。

Il viennent jusque dans nos bras Égorer nos fils, nos compagnes !

(奴らはわれらの元に来て)

(われらの子と妻の喉を搔き切る。)

ちなみに、égorgerは「家畜などの喉を切り屠る」というニュアンスの動詞です。惨殺、屠

殺です。虫けらのようじ殺すという意味です。単に「殺す」は tuer ですが、その数倍ドギツイ言葉といえます。そして、この言葉は有名なルフランへと続きます。

Aux armes, citoyens, Formez vos bataillons. Marchons, marchons !

(武器を取れ、市民よ) (隊伍を組むのだ)

(進め、進めー)

Qu'un sang impur Abreuve nos sillons !

(奴らの不浄の血をわれらの畑に浴みこませるのだー)

「戦争と平和」という言葉がありますが、戦争の反語として平和を想定する」とは若干無理があると私は思います。同じように「愛と平和」という言葉にも違和感を覚えるのです。愛と平和は決して同義の言葉ではありません。確かに、愛によって争いなどが回避される事例も少なくないでしょう。しかし、人類における、ほとんどの争いは——殺し合いは、戦争は、愛によつてもたらされるのも事実です。愛があるから戦争が起こるのです。その根源は、今言つた、妻を、娘を、群のメスを、侵略者（他の群のオス）から守ろう、という本能に求められます。煎じ詰めれば、自分の遺伝子を守り未来へ継続させようという本能なのです。

繰り返します。自分の遺伝子を守り未来へ継続させようという本能にわれわれは生かされています。もし、20万もの同胞の女を奪われて、一揆のひとつも起こせない民族がいたとしたら、その民族はその時点で滅亡しているのと同じこといつても過言ではありません。生物学上、

存在の意味がないのです。それが、自然淘汰の摂理です。

### 敵兵と寝た女

さて、フランスですが、1944年8月のパリ解放後、こんな光景があつたことが知られています。ドイツ兵相手に春をひさいでいた娼婦、ドイツ兵の子供を生んだ女、ドイツ将校と噂があつた女優などが次々と群衆の前に引き出され、頭を刈られて石つぶてを浴びせられたのです。「敵兵と寝た女」に対する市民の憎悪とはかくもすさまじいのです。

朝鮮王朝は、同胞の女を守ることもせず、支那軍に屈服し、むしろ女を差し出すことで民族の延命を図りました。パリの民衆が、ドイツ兵相手の娼婦に石を投げたのとは対照的に、韓国は日本軍相手に稼いだ慰安婦に対してではなく、日本政府と日本人に呪詛の言葉を吐き続けています（もちろん、元慰安婦の方々に石を投げると言いたいのではありません）。

女のために戦うこともできなかつた民族が、その情けない歴史の鬱憤うつぶんを反日思想に絡めて日本にぶつけてきたのが、慰安婦問題といえます。これに限らず、韓国の反日は、かつての支配層だった支那、あるいは李朝や両班に向けるべきルサンチマン、不良債権化した「恨」を、日本に転嫁したもののがほとんどであると断言していいでしょう。

女を犯し征服者の子を生ませ、男は去勢して使役する——白人や支那人といった肉食系文化圏ではごく当然の植民地支配を行つてこなかつたから、戦後70年が経とうとしているのに今もなお韓国からなじられるのです。日本は朝鮮統治に失敗したのです。恐怖と屈辱のない植民地支配は無意味であるということです。

いや、ちょっとと言い過ぎました。異民族統治には恐怖だけではなく快樂も不可欠な要素であることを見忘れていたようです。甘く狂おしい阿片<sup>あん</sup>の快樂です。麻薬を売りつけて骨抜きにするというのは、人類が考え出したもつとも効率的で回収率の高い他民族統治の手法だったかもしれません。さすが植民地經營の第一人者、大英帝国といえます。

明治初年、國際社會にデビューしたばかりの日本は、四海同胞などという淡い理想に燃える青二才でした。近代的立憲君主制のモデルとして日本は大英帝国をよき参考にしましたが、しかし、その巧みな植民地經營のノウハウまでは学ぼうとはしなかったのです。

なるほど、倉山氏のいうとおり、「植民地をもつ資格」がなかつたのも道理で、日本の朝鮮統治が「人類史上類例のない最悪の植民地統治」と呼ばれるゆえんだつたかもしません。そして、私はそんな日本を誇らしく感じるのです。

## あとがき

韓国人はふた言目には歴史認識という言葉を振りかざして日本を非難します。しかし、私は、顔を赤らめて日本にレキシニンシキの共有を迫る韓国人がどこかカウブな少年のように見えてしまうのです。

Never 日韓翻訳掲示板が存在していたころ、私も興味をもつてよくサイトをのぞいていました。日韓のネット族が集えば、当然のごとく歴史論争が始まります。公平に見て、日本側が論争で敗北しているという場面に出会つたことがありません。日本側が第一次史料に基づくデータや写真、公式文書を示したURLを貼つて示すと、韓国側はたちまちのうちに沈黙します。これで納得してくれたのかな、と思うと、そのスレッドは打ち捨てられ、次の日にはほぼ同様のタイトルのスレッドが新たに立ち、何事もなかつたように、同じ論争がまた始まるのです。日本側のデータ提示はまったくムダということになります。

単純に考えれば、韓国側の議論放棄、逃亡<sup>とうおう</sup>ということになりますが、彼らにはその意識すらないでしよう。掲示板に貼られた史料はデータがあまりにもショッキングだったのか、彼らはそれをないものと認識してしまうようなのです。つまり記憶から消去してしまったわけです。

まるで、夜中、襖の向こうの見てはいけない両親の行為を目撃してしまった子供のように。誰でも親の行為など見たくもないし想像もしたくないでしよう。しかし、それがあつてこそ

現在の自分が存在していることも厳然たる事実であり、成熟した思考をもてば容易に理解できることです。

何ごとも原因があつて初めて結果があるのです。言葉にすれば当たり前に聞こえるこの理屈を人類で最初に発見したのがお釈迦さまでした。唯物史観を標榜するはずの左翼の学者や評論家の先生方も、なぜか日韓関係に関してはこの理屈を忘れ、ひたすら情念や感傷で歴史を語ろうとするのが不思議でなりません。しかしまた、その情念の部分を見逃してしまえば、日韓関係という倒錯した国家関係を読み解くこともできないのも事実です。本書は、日韓関係の情念の部分にむしろ徹底的にこだわった本といえます。

さて、親の行為を目撃してしまった子供は、幼いながらもそれにどう対処するのでしょうか。たいがいの子は『見た光景』を意識の中に閉じ込め自然と忘れようします。中には自分なりに合理化して処理しようという子もいるようです。このときの合理化を間違えると、彼の意識に深いトラウマを残すことになります。たとえば、「パパとママがケンカしている」あるいは「パパがママをいじめている」といった合理化です。この子は無意識のうちに父親に対する憎悪を育てているかもしれません。あるいは長じて性行為自体に極度の嫌悪感をもよおすことになるかもしれません。私は韓国人インテリが好んで口にする日韓併合＝強姦論は、まさしく、この合理化の失敗例だとと思うのです。

韓国人をウブな少年に喰えた真意はここにあります。純情と言い換えてもいいでしょう。彼

らは傷つくのが怖いのです。ゆえに他罰的になるともいえます。

韓国人は、途上国ということだけで東南アジアの人々に尊大不遜な態度を見せることがあります、韓国人が東南アジア人に逆立ちしてもかなわない決定的な事実がひとつあります。旧宗主国相手に戦い、血を流して独立を勝ち取ったという事実です。これが歴史に刻まれる限り、私は戦争というものを全否定しません。

翻つて韓国を見れば、清国からの独立は日本が日清戦争で血を流した結果に過ぎませんし、その日本からの独立は、日本の敗戦によるものでした。つまり、韓国は一度も自分たちの手で独立を勝ち取った経験がないのです。民族としての通過儀礼を果たしていない、いわば童貞の国家といえます。韓国が周辺諸国に対し、ともすれば不相応に尊大な態度を取りたがるのは、大人に囲まれた童貞の坊やが、精一杯粋がつて遊び人を気取つてみせる姿に重なります。

しかし、少年は可能性を秘めているのです。彼らにとつて真の意味の建国、いわば童貞を捨て男になる機会は、南北統一という大事業にこそあります。これだけは、われわれも下手に手を貸すこともなく、彼らだけの手で成しとげさせてあげたい。

そして彼らが立派に男となつたとき、眞の意味での対等な日韓関係が生まれるのであります。

## 参考文献

- イザベラ・パード／時岡敬子訳『朝鮮紀行－英國婦人が見た李朝末期』（講談社学術文庫）  
林鎮国『ソウル城下に漢江は流れる－朝鮮風俗史夜話』（平凡社）  
上野正彦×文国鏡『日本の死体・韓国の屍体』（青春出版社）  
小倉紀蔵『韓国人のしくみ』（講談社現代新書）  
吳善花『スカートの風』（正統）（三交社）  
吳善花『ワサビと唐辛子』（祥伝社）  
姜ヨンスウ『瓦台の風水師－これを知らなければ韓国はわからない』（文芸春秋）  
金仁謙／高島淑郎訳『日東壯遊歌－ハングルでつづる朝鮮通信使の記録』（東洋文庫）  
金文学・金明学『韓国民に告ぐ』（祥伝社黄金文庫）  
金容雲『韓国人と日本人－双対文化のプリズム』（サイマル出版会）  
金完燮『親日派のための弁明』（青思社）  
シャルル・ダレ／金容權訳『朝鮮事情』（平凡社）  
黒田勝弘『韓国人の歴史観』（文春新書）  
市川速水×黒田勝弘『朝日vs. 並経ソウル発－どうするどうなる朝鮮半島』（朝日新書）  
櫻井よしこ×金両基『日韓歴史論争－海峡は越えられるか』（中央公論社）  
黄文雄『韓国は日本人がつくつた－朝鮮総督府の隠された真実』（徳間書店）  
黄文雄『歪められた朝鮮総督府』（光文社）  
黃文雄『立ち直れない韓国』（謝罪要求と、儒教の呪い）（光文社）  
黃文雄『台湾・朝鮮・満州・日本の植民地の真実』（扶桑社）  
崔基鏘『韓国 脱落の2000年史』（祥伝社）  
崔吉城『親日』と『反日』の文化人類学（明石ライブラリー）  
鄭大均『韓國のナショナリズム』（岩波現代文庫）  
豊田有恒『韓国へ、懲りと悲しみ』（ネスコ文藝春秋）  
  
中岡龍馬『韓国人につけるクシリ－自覚症状なしのウリナライズムの病理』（オーネクラ出版）  
西岡力『よくわかる慰安婦問題』（草思社）  
根本敬・船橋英雄・湯浅学『元祖ディープ・コリア』（K&Bブリッシャーズ）  
野平俊水『日本人はピックリ！韓国人の日本偽史』（小学館文庫）  
朴承武『ソンビとサムライ－韓国人外交官の見たニッポンの姿』（東海教育研究所）  
朴泰赫『醜い韓国人－われわれは「日帝支配」を叫びすぎる』（光文社）  
古田博司『東アジア「反日」トライアングル』（文春新書）  
吉田博司『朝鮮民族を読み解く』（筑摩書房）  
松木国俊『ほんとうは「日韓併合」が韓国を救った！』（ワック）  
宮島博史『両班－李朝社会の特權階級』（中公文庫）  
室谷克実『惡韓論』（新潮新書）  
室谷克実『韓国人』の経済学（ダイヤモンド社）  
柳智尚『韓国病診断－先進国への高いハードル』（ア紀書房）  
現代コリア編集部・編『韓国・朝鮮そこが知りたい』（ア紀書房）  
朝日新聞韓国取材班『韓國の素顔』（朝日新聞社）  
朝鮮日報編『韓国人が見た日本－日本を動かしているもの』（サイマル出版会）  
  
村山智順『朝鮮の鬼神』（朝鮮総督府）  
A・キーフ／近藤希一監訳『トランス文化精神医学』（誠信書房）  
野村伸一『巫（かんなぎ）と芸能者のアジア－芸能者とは何をするのか』（中公新書）  
金泰坤・池春相『靈を招く－韓国のシャーマン・フォークロアの眼10』（国書刊行会）  
『朝鮮の民謡』（岩崎美術社）  
渕上恭子（論文）『韓國キリスト教の信仰治療－現代シャーマニズム社会におけるキリスト教会』（慶應義塾大学）  
古田富建（論文）『韓国キリスト教系新宗教のイエス觀－李龍道の晩年期の再考察とその系譜團体のイエス觀』（慶應義塾大学）  
李善熙（論文）『韓國のシャーマニズムと儀礼（クツ）の意味－全南珍島の事例を中心に』（シャーマニズム研究会）